

氏名	篠原有子
学位の種類	博士(異文化コミュニケーション学) 課程博士
報告番号	甲第457号
学位授与年月日	2017年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	日本映画の英語字幕における標準化 - 制作プロセスの観点から
審査委員	(主査) 武田 珂代子 灘光 洋子 オヘイガン 統子 (オークランド大学文化言語学部准教授)

I. 論文の内容の要旨

『日本映画の英語字幕における標準化 - 制作プロセスの観点から』

目次・本文・補遺・参考文献・映画作品引用リストを含め、全 243 頁

(1) 論文の構成

第1章 序論 研究の背景、目的、意義、論文の構成

第2章 先行研究

翻訳学における視聴覚翻訳、字幕翻訳の定義、日本における字幕研究に関する先行研究の批判的レビュー

第3章 理論的枠組みと鍵概念

字幕翻訳における社会文化的アプローチ、英語字幕の特性、社会文化的アプローチに関する検討、理論的枠組みとしてのローカリゼーション・モデルと国際化プロセス、鍵概念（標準化、パトロネージ）

第4章 研究方法 インタビュー、文献調査、事例研究

第5章 字幕制作プロセスと字幕翻訳の特性

字幕制作プロセス、相互作用の産物としての字幕、字幕翻訳の特性

第6章 制作プロセスがもたらす訳出の特徴

英語字幕に対するパトロネージ、制作プロセスによる影響、翻訳者の権力、英語字幕の標準化仮説

第7章 事例分析と結果

異文化要素と方略分類の枠組み、DVD 2 作品の英語字幕

第8章 考察

英語字幕における標準化、言語バランスの非対称性と標準化、字幕翻訳の新動向と標準化、まとめと課題

第9章 結語 研究結果の要約、今後の展望

補遺

参考文献

映画作品引用リスト

(2) 論文の内容要旨

本論文は日本映画の英語字幕をテーマとし、英語字幕の訳出における特徴について、字幕制作プロセスや想定される視聴者などの諸要因に着目し、翻訳学における「ローカリゼーション・モデル」の「国際化」プロセス、「標準化」「パトロネージ」などの概念に依拠して考察を行ったものである。英語字幕の訳出に影響を与える要因を特定し、それらの要因が訳出にどのような特徴を生じさせるかを考察し、事例研究を通して検証することを目的としている。

理論的枠組みとしては、英語字幕が複数の他言語への翻訳の起点となる中間バージョンとして機能することに注目し、「ローカリゼーション・モデル」とその構成要素である「国際化プロセス」(ピム, 2010)に関する論考を適用した。また、「標準化」(Toury, 2012[1995])を起点テキストに含まれる性質や特徴が目標テキストにおいて低減されることと再定義し、さらに、個人や組織が翻訳を促したり阻害したりする目的で行なう権力の行使として「パトロネージ」(Lefevere, 1992)という概念を用いて分析・考察を行った。

まず、英語字幕翻訳者と制作会社へのインタビューおよび文献調査に基づき、以下の3点を導いた。第1に、「パトロネージ」として映画会社、日本政府による「クールジャパン戦略」、および視聴者の期待などがあり、経済的要素やイデオロギー的要素が複合的に作用して英語字幕の制作に影響を及ぼしている。第2に、中間バージョンという英語字幕の特性、視聴者の多様性への対応、英語の優位性が、英語字幕に標準化を生じさせる可能性がある。第3に、起点(日本の制作会社)主導の翻訳プロセスという特殊なコンテキストで英語字幕翻訳者が持つ「権力」を背景に、翻訳者が視聴者の多様性への対応を重視した場合、字幕が標準化されやすい。これらにもとづき、日本映画に付けられた英語字幕の訳出には標準化傾向があるという仮説を立てた。

次に、この仮説を検証するために事例研究として『*Shall we ダンス?*』『千と千尋の神隠し』の起点テキストに含まれる異文化要素が英語字幕にどのように訳出されているのかを、翻訳方略を枠組みとして分析した。別個に分析した米国映画の日本語字幕における標準化率と比較したところ、英語字幕の標準化率が日本語字幕の標準化率よりも著しく高いことが示された。このことから、本論文が対象とした作品については、日本語字幕との比較で、英語字幕の訳出に標準化の特徴があることが認められた。

以上の論考から、英語字幕の中間バージョン性、想定される視聴者の多様性、起点主導のプロセスによる翻訳といった英語字幕の制作プロセス上の特性、および英語の優位性が、英語字幕の訳出に影響を与える要因として考えられ、これらの要因が作用することで、本論文が分析対象とした作品の英語字幕に標準化の特徴があることを明らかにした。ただし、対象作品のジャンルや言語ペアによっては、本論文とは異なる結果が生じる可能性があるため、この特徴の一般化は困難であり、様々な作品による検証が今後の課題である。また、近年、英語字幕において標準化とは逆の非標準的字幕が出現していることを踏まえ、グローバル化が内包する均一化(標準化)とローカル化(非標準化)によって新たな形態の字幕が生まれている可能性についても今後検討すべきである。

II. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

研究対象、理論的枠組み、研究方法、分析結果と今後の研究課題、論文の形式の視点から、本論文の主な特徴を以下にまとめる。

【研究対象】これまで学術的研究の対象とされることがほとんどなかった日本映画の英語字幕に焦点を当てている。とりわけ、英語字幕翻訳者および制作会社へのインタビューや日本語字幕翻訳者としての自らの経験などを通して、日本における英語字幕の制作プロセスを可視化した点、また、米国映画の日本語字幕と比較して分析を行った点は特記すべきである。

【理論的枠組み】ピム(2010)がソフトウェアやウェブサイトを対象として理論化した「ローカリゼーション・モデル」における構成要素である「国際化」(internationalization)を英語字幕制作プロセスの理論的説明に応用している。また、Toury(2012[1995])が翻訳の普遍的特性のひとつとして提案した「標準化(standardization)」を再定義し、さらに、翻訳プロセスの参与者間の力関係に言及する「パトロネージ(patronage)」(Lefevere, 1992)という概念を用いて、英語字幕制作の訳出における影響要因を分析している。

【研究方法】まず、文献研究と英語字幕翻訳者および制作会社へのインタビューをもとに、日本映画に付けられる英語字幕の制作プロセスを可視化するとともに、英語字幕の訳出では標準化の傾向が見られるという仮説を立てた。次に、その仮説を検証するために事例研究として日本映画2作品の英語字幕および米国映画2作品の日本語字幕における異文化要素の翻訳方略を分析し、比較した。翻訳方略の分析に関しては、Pedersen(2011)の分類法を修正して用い、著者のみならず第三者2名による分析も含めて、総合的に評価した。

【分析結果と今後の研究課題】事例研究で、日本映画2作品の英語字幕における異文化要素訳出において、「一般化」「置き換え」「省略」などの標準化方略が用いられている割合が、米国映画2作品の日本語字幕と比較して、著しく高い結果が出た。今後の研究課題として、異なるジャンルや言語ペアでの同様の考察、また、近年、ユーザーによる字幕や一部のジャンルで台頭している非標準的な字幕に関して、グローバル化における均一化とローカル化という視点からの考察が挙げられている。

【論文の形式】用語の定義、研究の対象範囲が明確に示され、一貫性と結着性のある議論が展開される構成となっている。明快な言語で書かれており、図表が効果的に使用されているため、読みやすい論文である。

(2) 論文の評価

本論文は研究対象、考察と事例分析における理論的枠組みや概念の適用の仕方などにおいてオリジナリティーに富むものであり、視聴覚翻訳(audiovisual translation, AVT)研究のコミュニティに対し有益な情報と論考を提供している。特に以下の点で高く評価できる。

まず、これまで学術研究の対象とされることがほとんどなかった日本映画の英語字幕につ

いて、字幕制作プロセスや訳出傾向を含めた包括的な考察を行い、急速に発展し続ける AVT 研究領域に対し重要な貢献をしている。特に、英語字幕翻訳者と制作会社へのインタビューをもとに、日本語字幕翻訳者としての著者自身の経験を参照しながら、英語字幕の制作プロセスを可視化した点は特記すべきだ。一般に、翻訳プロセスは目標文化主導で始まるという認識のもとで翻訳研究は行われてきたが、日本映画の英語字幕の場合、起点文化（日本の制作会社）が主導する翻訳プロセスになっている点を明示したことは有意義である。

また、英語字幕が他言語への翻訳の起点として使われる中間バージョンの機能を果たすことに注目し、ピム (2010) が理論化した「ローカリゼーション・モデル」における「国際化」を英語字幕制作プロセスの理論的説明に応用している点は先進的だ。また、Touy (2012[1995]) が翻訳の普遍的特性のひとつとして提案した「標準化」を字幕のコンテキストに合わせて再定義した点、さらに、字幕の制作プロセスには翻訳者だけでなく多くの参加者が関わり、その参加者間の力関係に注意を向ける必要があるとして、「パトロネージ」(Lefevere, 1992) の概念を適用した点も高く評価できる。

さらに、事例分析で Pedersen (2011) による翻訳方略の分類法を適用する上で、その欧州言語志向に伴う問題点に対処し、日本語・英語間翻訳のコンテキストを考慮した調整・修正を行ったことは賢明である。加えて、翻訳方略の分類における主観性の問題をできるだけ排除するために、著者自身だけでなく、第三者 2 名による分類結果を含めて、総合的に評価した点は、データの質に対する著者のコミットメントを表している。

事例分析の対象とした映画作品と異なるジャンルや言語ペアでは、本論文と異なる分析結果が生じる可能性を著者は認識しており、今後の研究が待たれる。また、近年注目を集めているユーザー作成の字幕や一部ジャンルの字幕における非標準化的訳出にも注目している点は重要である。

国際的に大きな発展を見せている AVT 研究領域に対し、日本から新たな情報を提供しただけでなく、字幕翻訳の制作プロセスや社会文化的要因にも注意を向けた革新的なアプローチを示したことで、本論文は翻訳研究全般にも大きな貢献をするものである。映画字幕に対する社会的関心を背景として、翻訳教育や異文化理解教育においても本論文の成果が応用されることを期待する。